研究ノート

保育士養成課程及び養護教諭養成課程の女子大学生における「新版　LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」使用による発達障害の理解

下村　雅昭

Effectiveness of a Training Program for Students Understanding of Disability using a “Psychologically Simulated Experience for LD, ADHD.” for Students in the Training course of Nursery teacher and Yogo teacher (School Nurse)

Masaaki Shimomura

Effectiveness of a training program for students understanding of disability using a “Psychologically Simulated Experience for LD, ADHD” were examined.

Students in the training course of nursery teacer (n = 35) and yogo teacher (school nurse, n = 64) were participated in this study.

The basic programs of “attention deficit” were selected in the present study. Special Educational Needs Specialist conducted this program.

All students participated in the program reported their considerations about support methods for children with LD and ADHD especially attention deficit.

The results from reports analysis, effectiveness for understanding of disability and support methods of LD and ADHD were confirmed.

Key words: simulated experience, developmental disabilities, nursery teacher, yogo teacher

Ⅰ．研究の背景

通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する実態調査では，LD，ADHD，高機能自閉症等の児童生徒の在籍率が 6.5％と報告された（文部科学省 2015）。

このような報告を受け，学校や保育の現場では総合的なアセスメントに基づき，個別の指導計画や教育支援計画が作成され，特別支援教育の普及が進んできている[1)]。

一方では，発達障害全般に対する無理解や偏見から，当事者やその家族が様々な苦痛を感じていることも多く報告されている[2) 3)]。近年では学歴偏重や経済停滞，失業率の増加や格差社会など国民全体が不安やストレスを抱えながら生活する背景要因が多数存在する。学校現場では学級崩壊や不登校といった課題に対して，新たな対応策が必要とされてきている。

近年ではこども園の設置が進み，保育の現場にも変容が迫られている。特に幼児期からの発達障害の有無について，早期発見・早期支援が望まれる。

児童生徒の立場からは，高学力や社会性，協調性や柔軟性等がより求められる環境にあると言え，これは発達障害を有する者にとっては大変困難を伴う場面を含むことになる。発達障害に対するより深い理解と，支援が益々重要となっている。

日本 LD 学会では，LD・ADHD の理解・啓発のために，「LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」が開発され，2007 年に新版が刊行された[4)]。保坂と保坂（2008）は山梨県の公立小学校教職員を対象に同プログラムを実施し，LD 等の発達障害の理解に有効であると報告している[5)]。秋元と落合（2009）は教育学部生および小学校教師を対象に同プログラムを実施し，子どもたちの抱える困難さに気づき，若い教師の良心を呼び起こし，教師

京都女子大学家政学部生活福祉学科

の役割認識を促す可能性を示唆している[6]。

発達障害者支援法（2004）成立に伴い，学校全体で支援に取り組むことが求められており[7]，養護教諭養成においても一般的な健康観察に加え，多方面からの観察や関係者との連携が重要視されるようになった[8]。健康相談においては発達障害を有する児童生徒を全教職員が理解し対応することの必要性が示されている[9]。

このような背景から，教職員はもとより保育士や養護教諭を目指す学生にとっても，LD 等発達障害をより効果的に理解するための学習機会を持つことが望まれる。

Ⅱ．研究の目的

本研究では「LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」を使用し，発達障害に対する大学生の理解・学習への効果について調べることを目的とした。今回は特に保育士養成課程および養護教諭養成課程の学生に対する基礎資料を得ることとした。

Ⅲ．研究方法

1. 対象

保育士養成課程に在籍する女子学生のうち 35 名が本研究に参加した。更に福祉系学科に在籍する女子学生のうち，養護教諭養成課程の科目受講生 67 名を研究対象とした。研究の趣旨および方法を説明し，研究参加への同意が得られた者を分析の対象とした。

2. 疑似体験プログラム

日本 LD 学会刊行「新版 LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」を使用した。今回は初級の課題から「Ⅰ．注意・集中」の（1）注目・集中，（2）不注意，（3）選択的注意・視覚を使用した。

特別支援教育士がプログラムの説明および実施を担当した。実施時間は約 40 分間であった。いずれの課題においても特別支援教育士がプログラムの実施マニュアルの手順に従って実施し，体験後に独自のワークシートを用いて内省報告させた。

3. データ採取・評価

各課題ごとにワークシートに記入させ，すべての記入を終えた時点でシートの回収を行った。すべての項目に記入したものを分析の対象とした。3 回生のうち 3 名の記入が一部満たされていなかったため，そのデータを削除した。

4. 課題の解説

ワークシート回収後に，プログラム実施マニュアルに示される各課題のまとめと解説を特別支援教育士が紹介した。

Ⅳ．結果

(1) 注意・集中

ワークシートに記入された，課題（木の数を数える）が遂行出来なかった理由をまとめ表 1 に示した。多くの学生が妨害刺激（他の文字を読む，計算をする等）のために本来の課題を遂行出来なかったと記入した（複数記入）。

「注意・集中」の課題が遂行出来なかった時の気持ちについては表 2 に示す結果が得られた。今回の課題遂行が無理であると感じた者が多くいたが（37.1%，35.9%），悔しいと感じた者や自己否定を感じた者も多かった。

課題実施手順に含まれる叱責や声かけに対する参加者の気持ちについて表 3 に示した。教師への怒りを感じた者が多くみられた（40.0%，42.2%）。他人と比較した，恥ずかしいと感じた，自己否定した者もそれぞれみられた。

表 1.「注意・集中」の課題が遂行出来なかった理由

	保育（n＝23）	（%）	養護（n＝64）	（%）
文字が妨害した	24	68.6	45	70.3
計算が妨害した	20	57.1	41	64.1
蝶が妨害した	5	14.3	20	31.3
複数の課題は困難であった	6	17.1	18	28.1
叱られたため停滞した	3	8.6	3	4.7
課題提示が速すぎた	1	2.9	1	1.6
集中が切れた	2	5.7	1	1.6

表 2.「注意・集中」の課題が遂行出来なかった時の気持ち

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
課題遂行は無理だと感じた	13	37.1	23	35.9
悔しいと感じた	10	28.6	15	23.4
自己否定した	4	11.4	13	20.3
苛立ちを感じた	6	17.1	11	17.2
焦りを感じた	5	14.3	7	10.9
遂行を諦めた	2	5.7	3	4.7
他人と比較した	0	0	6	9.4
教師や教材に不満を感じた	2	5.7	5	7.8
不安を感じた	5	14.3	4	6.3
もどかしく感じた	4	11.4	3	4.7
次は出来ると感じた	2	5.7	3	4.7

表 3. 叱責や声かけに対する感情について

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
教師へ怒りを感じた	14	40.0	27	42.2
課題を放棄した	2	5.7	13	20.3
焦りを感じた	7	20.0	10	15.6
他人と比較した	1	2.9	9	14.1
恥ずかしいと感じた	7	20.0	9	14.1
自己否定した	6	17.1	9	14.1
悔しいと感じた	3	8.6	6	9.4
悲しいと感じた	2	5.7	6	9.4
不安を感じた	0	0	3	4.7
叱られる恐怖を感じた	1	2.9	2	3.1
もどかしいと感じた	1	2.9	1	1.6
次はできると感じた	1	4.3	1	1.6

表 4. 必要な支援内容について

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
励ます，優しく接する	18	51.4	48	75.0
課題を単一に	8	22.9	23	35.9
課題の難易度下げる	4	11.4	13	20.3
解決方法を指示	7	20.0	6	9.4
責めない	2	5.7	2	3.1
出来ることから行う	1	2.9	2	3.1
躓き内容確認・解決	2	5.7	2	3.1

「注意・注目」課題を経験して，どのような支援が必要か記入させた。その結果，励ましたり優しく接することが必要と記入した者は最も多くみられた（51.4%，75.0%）。課題を単一にすること，課題の難易度を下げることも比較的多くみられた（表 4）。

(2) 不注意

不注意の症状がある子どもに必要な学習支援について，記入結果を表 5 に示した。指示を単一にすることと記入した者が最も多かった（65.7%，65.6%）。説明を明確にすべきであると感じた者は 62.9%および 46.9%であり，妨害刺激を除去することや，ゆっくり課題提示する必要性を感じた者も比較的多くみられた。

(3) 選択的注意・視覚

選択的注意がうまく出来なかった原因についての記入結果を表 6 に示した。

ほとんどの者が妨害刺激が多い事を挙げていた（97.1%，96.9%）。

表 5. 不注意の症状がある子どもに必要な学習支援について

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
指示を 1 つに	23	65.7	42	65.6
説明を明確に	22	62.9	30	46.9
妨害刺激除去	5	14.3	16	25.0
ゆっくり提示	2	5.7	14	21.9
優しく対応	1	2.9	5	7.8
個別の対応	1	2.9	1	1.6

表 6. 選択的注意がうまく出来なかった原因について

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
妨害刺激が多い	34	97.1	62	96.9
視力が悪い	0	0	1	1.6
動物名をしらない	1	2.9	1	1.6
その他	0	0	1	1.6

表 7. 選択的注意に対する支援について

	保育（n＝35）	（%）	養護（n＝64）	（%）
妨害刺激排除	29	82.9	47	73.4
要点の強調	26	74.3	46	71.9
補足説明	2	5.7	8	12.5

選択的注意に対する支援についての記入結果を表 7 に示した。妨害刺激の除去（82.9%，73.4%）と要点の強調（74.3%，71.9%）と記入した者が多くみられた。

Ⅴ．考察

障害理解のために使用されるプログラムは他にも存在するが，今回使用した疑似体験プログラムは LD・ADHD 啓発のために，日本 LD 学会で開発されたものである。より広く，より深い理解・啓発のために利用されることが望ましいプログラムである。今回使用した「注意・集中」は ADHD，特に不注意優勢型の困難さとして広く知られるところであるが，すべての発達障害を有する者に共通する最も大きな特徴とも言われている。その機序としては，脳の軽度の機能障害によって，自分の興味や関心のないことには覚醒レベルが低下して注意散漫になる事とされている。それ故に気が散りやすく，一つのことに長い時間注意を集中できなくなってしまう。その結果，授業中の注意散漫は学力の低下につながり，成人例では仕事中のトラブルに繋がり，就労が困難にな

る場合もある。

このような生理的背景が報告されていても，不注意の原因はその子の怠慢や人間性，ひいては保護者の育て方によるものだと勘違いされることも多い。その場合，叱責や非難されることが生じ，自己肯定感を損なう結果となる。今回の結果においても疑似体験と承知しながらも自己否定を感じたり，他人と比較して焦りや不安を感じている者が多かった。注意・集中に困難を示す子ども達は日常的にこのようなストレスに暴露されている可能性が考えられた。この点に関しては，学校全体で支援を行う事が重要であり，養護教諭はそのキーパーソンとなり得る[9]。今回の多くの学生が記入した「教師に対する怒り」や「諦め」の感情はやがてひきこもりや不登校といった深刻な二次障害を生起する可能性がある[10]。このような結果から，早期発見と早期支援の重要性が考えられた。特に幼少期における支援の必要性が近年重要視されており，通常学級担任や科目の担任には，このような認知特性のある子どもに対する学習支援への理解と実践が求められる。本研究で回答された「課題を単一にする」ことや「要点を強調」することなどは正に重要視される支援の一つである。

今回の結果をもとに考察すると，必要な支援の内容や課題遂行が困難となった原因についての記入結果は概ね，体験プログラムマニュアルに記載されているねらいに沿ったものであった。従って，今回疑似体験によって学生のより深い理解が進んだ可能性も示唆された。

Ⅵ. 結論

今回の疑似体験プログラムにより，参加学生のより深い理解が進んだ可能性が示唆された。更に早期発見および早期支援の重要性も考えられた。

文　献

1）上野一彦他：特別支援教育の理論と実践　Ⅰ概論・アセスメント，金剛出版，2007。

2）野沢和弘：あの夜，君が泣いたわけ　自閉症の子とともに生きて，中央法規，2010。

3）高橋紗都・高橋尚美：うわわ手帳と私のアスペルガー症候群，クリエイツかもがわ，2008。

4）日本 LD 学会：新版　LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム，2007。

5）保坂俊行・保坂美智子：LD 等の発達障害の理解のための疑似体験ワークショップにおける「新版 LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」の検討―参加者による評価アンケート結果の分析―，LD 研究 17(3)374-383，2008。

6）秋元雅仁・落合俊郎：「LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラム」を活用した研修の有効性に関する考察，LD 研究 18(2)189-196，2009。

7）発達障害者支援法ガイドブック編集委員会：発達障害者支援法ガイドブック，河出書房新社，2007。

8）植田誠治他：新版・養護教諭執務の手引き　第 8 版，東山書房，2011。

9）大谷尚子他：養護教諭の行う健康相談活動　第 8 版，東山書房，2009。

10）池上正樹：ドキュメントひきこもり　「長期化」と「高年齢化」の実態，宝島社新書，2010。